

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第21号 - 通巻第33号)

発行：2017年8月6日

特集論文2

江原慶

(東京大学 kei.ehara@gmail.com)

価値の内在性と価値形態論の射程

—塩沢由典氏のマルクス価値論批判によせて—

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-21-2

[http://www.unotheory.org/news\\_II\\_21](http://www.unotheory.org/news_II_21)

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail: [contact@unotheory.org](mailto:contact@unotheory.org)

ホームページ <http://www.unotheory.org>

# 価値の内在性と価値形態論の射程

——塩沢由典氏のマルクス価値論批判によせて——

江原 慶

## 目次

はじめに	1
1 関係主義的形態論と表現主義的形態論	2
2 選好表現と価値表現	6
3 国際通貨体制論に向けて	9

## はじめに

塩沢 [2017] にて塩沢由典氏は、自身が近年展開する「現代古典派価値論」の見地から、宇野派のマルクス経済学を論評している。「現代古典派価値論」の主要なメッセージは、塩沢 [2017]1 頁に以下のようにまとめられている。

1. 転形問題は価値規定において労働価値を生産価格と読み替えることで解消する。
2. 現代古典派価値論は、リカードとマルクスの価値論を発展させたものである。
3. 国際価値論の成功により、古典派価値論は新古典派に対する理論上の優位を回復した。

第2点の「発展」の眼目は、私の理解する限りでは、投入財貿易を含む国際価値論の展開であり、第3点と内容的には重なっている。これは、経済学がグローバル経済を分析するために、不可欠な基礎理論であるとされる。塩沢 [2017] 第20節「国際価値論という問題設定」では、宇野派のマルクス経済学原理論が、事実上一国経済論にしかかっておらず、現代

のグローバリゼーションはおろか、複数の資本主義国がしのぎを削っていた19世紀末の時点ですら、基礎理論になり得ていないことが批判されている。これは原理論と発展段階論の関係性をめぐる大きな問題であって、簡単に済ませることができないが、少なくとも現段階において、経済理論が一国経済論のままに止まっていてよいとは言えないと、私も考える。マルクス経済学原理論は、グローバル資本主義分析の基礎理論たりうるよう、再構築されなければならない。

ただしそれにあたって、マルクス経済学の価値論が、塩沢氏の「現代古典派価値論」に解消されてしまうとは思わない。「現代古典派価値論」は、新古典派とは異なる価値論を備えた、重要かつ強力な一つの経済理論体系であるが、逆に言えば、その一つに過ぎない。国際価値論の問題を措いたとしても、マルクス経済学には、「現代古典派価値論」にはないオリジナリティが残る。それは塩沢氏のまとめる自説の3つのポイントのうち、第1点にかかわる。

塩沢 [2017] 第26節「実体論の残滓」では、宇野による労働価値説の論証について、剰余のない経済での論証にしかかっておらず、不十分であるとされる。そして、宇野以後櫻井 [1968] 等で展開された「次元の相違」論を、「労働価値と生産価格とは、それらが表現される次元がことなり、転形問題は存在しないという労働価値説弁護論」(塩沢 [2017]74 頁)としてではなく、価値概念を生産価格概念に置き換える形でさらに推進させる必要性が論じられる。その結果「価値は、商品経済における交換価値であり、それは資本主義経済においては、ことなる資本家間の競争が規制する諸商品の交換比率である」(塩沢 [2017]76

頁) ことになるという。すなわち、価値=交換比率だとされるのである。

私自身も、生産価格論を「転形問題」のゴールとしてではなく、資本主義の市場を分析する出発点として据え直すべきだと考えている<sup>1)</sup>。このときの生産価格は、投下労働量が「転化」する対象ではなく、社会的再生産を構成する諸部門の投入-産出の連関である物量体系から導出されるものであり、その限りで塩沢 [2017] の主要論点の第 1 点と軌を一にしている。しかしこれは、生産価格以前に説かれる価値の概念が不要であることを意味するものではない。生産価格という概念を価値とは別個に立てることで、それに固有の問題領域が明らかにされたからといって、直ちに価値概念に立脚して説明されるべき問題群がなくなるわけではない。必要なのは、生産価格と価値、それぞれの概念が何を説明するのか、明確な区分をすることであって、どちらか一方に問題を還元することではないし、そうすることはできない。

塩沢 [2017] において、生産価格概念があれば、交換比率と区別された意味での価値概念は不要だとされる理由には、大きく分けて 2 つある。1 つは、マルクスや宇野の価値概念は実体主義に基づいているが、それは廣松 [2010] 等の関係主義の見地からすれば「物象化的錯視的錯視」(塩沢 [2017]75 頁) に過ぎないというものである。もう 1 つは、塩沢 [2017] 第 27 節「小幡道昭の価値内在説」にて述べられている。すなわち、小幡氏は価値実体説に代わって、価値内在説を主張しているが、それは貨幣が実在する市場を理論化するのに有効でない、という批判である。

そこで本稿では、これら 2 つの点を、それぞれ価値の内在性論と価値形態論の意義を明らかにすることを通して検討する。第 1 節では、価値の内在性論は、関係主義とは異なる角度から価値形態の問題を捉えるのに有用であることが主張される。続いて第 2 節では、価値の内在性に基づく表現主義的形態論が、貨幣実在型の市場像の基礎をなすものであり、新古典派ミクロ価格理論の選好理論を相対化する意義を持つことを論じる。最終節では、表現主義的形態論を備えた原理論の射程を、国際通貨体制に関連させて若干敷衍して述べてみたい。

## 1 関係主義的形態論と表現主義的形態論

塩沢 [2017] では、関係主義の立場から、価値の実体を問うことは無意味だとされる。それは、価値実体論を退け、価値の内在性を主張する小幡 [2016] においても同断であるとされる(塩沢 [2017]79 頁)。すなわち、交換比率と区別された意味での、超自然的な属性として、価値概念を考えることは、いかなる形であっても不毛だとされている。

関係主義的な価値論においては、関係性のうちから内属的な性質が想起される様々な例が、経済学的な価値や価値形態の理解に援用される。典型例としてしばしば引かれるのは、「価値関係の媒介によって、商品 B の現物形態は商品 A の価値形態になる。言い換えれば、商品 B の身体は商品 A の価値鏡になる」(Marx[1962]S.67) という『資本論』第 1 巻の文章に付された、次の注である。

見ようによつては人間も商品と同じことである。人間は鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、人間は最初はず他の人間の中に自分を映してみるのである。人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて人間としての自分自身に関係するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロの全体が、そのパウロ的な肉体のままで、人間という種の現象形態として認められるのである。(Marx[1962]S.67)

ここでは、人間が自分ひとりだけでは「人間としての自分自身」を認識し得ないことが、人間は「鏡」を持って生まれてくるわけではなく、「フィヒテ流の哲学者」でもないという言い方で強調される。その上で、他者を媒介としてはじめて「人間としての自分自身に関係する」とされる。このとき同時に、他者は、「人間という種の現象形態として認められる」と言われる。これが、「商品 B の身体は商品 A の価

値鏡になる」という本文に対応しているわけである。

ここで人間と商品とが対比されていることから、人間が人間関係を通して自己の人間性を把握するように、商品も他商品との交換関係を経てはじめて、その商品としての価値が成立することになる、というアナロジーがなされる。つまり、「人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて人間としての自分自身に関係する」ように、リンネル商品は、上衣商品との関係の下に、はじめて価値を備えた商品になる、と解されるのである。それゆえ、商品の価値は、その商品自身に備わるように感じられたとしても、それは他商品との交換関係が反映されているだけだということになる。こうして、関係主義の下では、「リンネル 20 エレは上衣 1 着に値する」といった、交換比率としての価値形態の成立によってはじめて、価値が成り立つものとされる。塩沢 [2017] で、価値概念が交換比率に解消されるのは、こうした関係主義的な価値理解によっていると考えられる<sup>2)</sup>。

価値実体論がこういう関係主義的形態論の批判にさらされるのは、それが価値形態論と二分法的に切り離された議論だからである。関係主義的形態論からすれば、価値形態と関わりを持たない、価値の実体なるものは、幻想以外の何物でもないということになる。問題は、価値形態論がこのような関係主義的形態論に尽きるものなのかどうか、というところにある。『資本論』には、上のような人間関係に擬えた価値形態についての説明が、他にも多く見られる。一般に比喩からインプリケーションを読み取るのは誤解のもとであり、それは控えられねばならない。しかし、比喩のどこまでが喩えられたものと通底しており、どこが違うのかを整理することができれば、喩えられたものの特性を理解するのに資するはずである。その意味での比喩の読解作業は、価値形態論が関係主義に還元されるのかどうか、明らかにしてくれるであろう。

『資本論』第 1 巻では、その第 1 章第 3 節 2 の a 「相対的価値形態の内実」にて、一通り価値形態の分析をやってみせたのち、b の「相対的価値形態の量的規定性」に入る前までのところが、比喩のオンパレー

ドとなっている。その中からいくつかをピックアップして、どういう意味で比喩になっているのか解読してみよう。その一つ目が、次のテキストである。

リンネルの価値関係のなかで上衣がリンネルと質的に等しいもの、同じ性質のものとして認められるのは、上衣が価値であるからである。それだから、価値がそれにおいて現れる物、または手でつかめるその自然形態で価値を表す物として認められているのである。ところで、上衣は、上衣商品の身体は、確かに一つの単なる使用価値である。上衣が価値を表現していないことは、リンネルの任意の一片が価値を表現していないのと同じことである。このことは、ただ上衣がリンネルとの価値関係の中ではその外でよりもより多くを意味しているということを示しているだけである。ちょうど、多くの人間は金モールのついた上衣の中では、その外でよりもより多くを意味しているように。(Marx[1962]S.66)

ここではまず、上衣が価値表現の媒体として、リンネルに等置されるのは、上衣が「価値」だからだとされる。上衣は、「価値がそれにおいて現れる *erscheint* 物」「その自然形態で価値を表す *darstellt* 物」とも言い換えられている。となると、上衣は価値を表現する物だ、と言ってしまってもよさそうであるが、それは即座に否定されている。曰く、「上衣が価値を表現 *ausdrück* していないことは、リンネルの任意の一片が価値を表現していないのと同じ」ということらしい。価値表現は、上衣やリンネルといった、個々の商品を取り上げてみてもなされるものではなく、どちらも必要とするのである。したがって、「上衣がリンネルとの価値関係の中ではその外でよりもより多くを意味している」と言われることになる。

最後の文では、このような価値形態のあり方が、人間の衣服に込められた社会的地位に喩えられている。人間は「金モールのついた上衣」、つまり軍服を着ていると、それを着ていないときよりも「多くを意味している」と述べられ、それは上衣がリンネルとの関係の中にいるときには、上衣単体だけのときよりも「多くを意味している」と同じだと言われるの

である。

この比喩は一見、軍服が、それなしでは知覚できない社会的な関係性を体現しているという意味で、価値形態と共通しているように見える。つまり、人間をリンネルに見立て、人間が軍服を着ることで、その人が軍人としてもつ権力という、目には見えない社会的地位を示すように、リンネルも自らを上衣に等置することで価値を表現するのだ、と言っているように読める。関係主義的な発想にしたがえば、軍人としての社会的権力が「金モールのついた上衣」そのものに備わるように取り違えられる事態は、価値関係が商品に内属する実体的性質のように思われるのと同様だということになる。

しかし、これは正確な読解ではない。リンネルの価値表現で「多くを意味している」のは上衣であるが、衣服による権力の表現において「多くを意味」するようになるのは「金モールのついた上衣」ではない。それを着る人間の方である。そして、リンネルの価値表現において「金モールのついた上衣」に対応するのは、やはり上衣ではなく、「リンネルとの価値関係」ということになる。

したがってこの比喩は、上衣が単体で価値を表せるわけではなく、リンネルに等置されて初めて価値を表現できるという事態を、人間も裸のままでは自らの社会的地位を示すことはできず、それに相応する衣服やら紋章やらを身にまとう必要がある、ということに喩えたものである。簡単に言うと、価値表現における上衣を、人間で表した比喩なのである。この比喩の範囲を、リンネルの価値を上衣で表す、価値表現の関係一般にまで拡張するのは、少なくともこのテキストを逸脱した読み方である。もしそのようにこの箇所の比喩を読み解くならば、価値形態は、このような権力関係の現れ方で喩えることのできない領域を含んでいることになるはずである。

次の段落では、王権との比喩が展開されているが、ここも比喩の範囲に注意して読む必要がある。

上衣の生産では、実際に、裁縫という形態で、人間の労働力が支出された。だから、上衣の中には人間労働が積もっている。この面から見れば、上

衣は「価値の担い手」である。といっても、このような上衣の属性そのものは、上衣のどんなにすり切れたところからも透けて見えるわけではないが。そして、リンネルの価値関係の中では、上衣はただこの面だけから、したがってただ具体化された価値としてのみ、価値体としてのみ、認められるのである。ボタンまでかけた上衣の現身にもかわらず、リンネルは上衣のうちに同族の美しい価値魂を見たのである。とはいえ、[I] リンネルに対して上衣が価値を表すということは、同時にリンネルにとって価値が上衣という形態をとることなしには、できないことである。[II] 例えば、個人 A が個人 B に対して王位に対する態度をとるということは、同時に A にとっては王位が B の姿を取り、したがって顔つきや髪の毛やその他なお多くのものを王が代わるごとに取り替えることなしには、できないのである。(Marx[1962]S.66. [ ]内は引用者)

ここでも、リンネルの価値が上衣で表される価値表現のうち、上衣に着目して、まずは上衣そのものに労働が対象化されており、それが「価値の担い手」となっているということが述べられる。しかしやはり、前の引用箇所にて上衣単体では価値を表さないとされたように、ここでも「価値の担い手」という上衣の属性は、「上衣のどんなにすり切れたところからも透けて見えるわけではない」と強調される。そして、リンネルとの関係のうちに、上衣が価値表現の媒体になることを、「価値体」という用語で指し示しているわけである。前の引用箇所でも「上衣がリンネルとの価値関係の中ではその外でよりもより多くを意味している」と述べられていたことが、ここでは上衣が単なる商品以上の存在に、つまり「価値体」となると言い換えられている。

このことを踏まえ、最後の2文 [I] と [II] の読解に入ろう。[I] は、やや難解である。「リンネルに対して上衣が価値を表す darstellen」という箇所は、リンネルの価値を上衣が表す ausdrücken という価値表現全体の間接関係を描写しているのではなく、上衣がリンネルに対し「価値体」となることを指したものと読むべきであろう。とすれば、ここでの「価値」は、リ

ンネルの価値ではなく、労働が対象化された「価値の担い手」としての、上衣自身の価値ととるべきことになる。あるいは、ここの「価値 Wert」には定冠詞がついていないということから、リンネルや上衣といった個別の商品の属性ではなく、価値そのものを体現する「価値体」としての上衣に示される、第3の存在ととることもできよう。しかしいずれにせよ、この文章は、リンネルの価値が上衣で表されていることを丸ごと置き換えた文章になってはいない。

続いてこれは、「リンネルにとって価値が上衣という形態をとる」ことを前提とするという。こちらの「価値 der Wert」は定冠詞付きであり、普通なら直前の「価値」を指しているはずである。その場合には、「価値が上衣という形態をとる」というのは、上衣に内在した価値、あるいは第3の存在としての価値が、上衣という具体的な形をとって顕現するという意味になる。「上衣が価値を表す」というのを、上衣が価値という異なる集合に属する要素に変換されるという意味で、 $f(\text{上衣}) = \text{価値}$ と記号化してみるとすると、そのとき同時に「価値が上衣という形態をとる」必要があるというのは、 $g(\text{価値}) = \text{上衣}$ も同時に成立している必要があるということと解せる。リンネルとの関係で上衣が「価値体」になれるのは、いわば上衣が価値表現の媒体として過不足のない、必要十分な存在となっていることを意味するわけである。

ただ、「リンネルにとって価値が上衣という形態をとる」という文中の「価値 der Wert」を、リンネルの価値と読んでも、全く間違いというわけではなからう。そのときには、この文章は、リンネルの価値を上衣で表現するという、価値表現一般と同じ内容を指すことになる。「形態」というタームを、価値の表現形態という意味であると強くとれば、むしろその読みの方が自然だし、リンネルの価値が上衣で表現されることが前提となって、「リンネルに対して上衣が価値を表すということ」になる、つまり上衣がリンネルとの関係において「価値体」となる、ということであれば、文章全体の意味もすっきり通る。

以上のように、[I] についての解釈の幅を見て取った上で、それを最後の比喩 [II] と突き合わせてみる。そこでは、B が A にとっての王になっている関係を

取り上げ、その関係のうちでは、B は王であるためには、王が B でなければならないとされる。このことが、「顔つきや髪の毛やその他なお多くのものを王が代わるごとに取り替える」必要がある、つまり個人の身体と王位が一体化しているという言い方で、強調されているのである。

この比喩は、上衣と価値とが互いに必要十分条件とならねばならないという、[I] についての前者の読み方と符合する。個人 B と王位とが一体化しているのと同じように、上衣の身体は価値と一体化し、「価値体」になっているというわけである。しかしこの王位の比喩は、やはり専ら上衣に関してなされている。個人 A は確かにリンネルに相当するが、リンネルの価値が上衣で表現されるのと同じように、個人 A に内在する何らかの性質が、個人 B で表現されるというわけではない。個人 A に王になりうる可能性はないし、それはここで示唆されてもいない。したがって、そのような“王位可能性”を、他者の身体を使って表現するということにもならない。これは、リンネルの価値を上衣で表現するという関係を読み込んだ、[I] についての後者の解釈が、最後の比喩 [II] を逸脱していることを意味する。このズレは、逆説的に、価値表現と王権の表現とがぴったり重ね合わせるわけではないことを示している<sup>3)</sup>。

王位の比喩という、後段の「およそこのような反省規定 Reflexionsbestimmungen というものは奇妙なものである。たとえば、この人が王であるのは、ただ、他の人々が彼に対して臣下としてふるまうからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである」(Marx[1962]S.72) という注に見られるような、価値形態との相似性が連想されがちである。すなわち、王権は王自身に備わっているように見えるが、実際には王と臣下との関係によって成り立っているのと同様に、商品の価値も、商品自身に備わっているかのように見えても、他商品との交換関係が商品個体に反映されているだけだという、関係主義的な例示としてとられやすいところである。しかし後段でそのような例示があるからといって、それより以前の比喩においても、価値形態を権力関係からのアナロ

ジで処理してよいということにはならない。以上で検討した箇所からは、価値形態を価値の表現形態として読む限り、それが王権の「反省規定」に回収しきれないことを、むしろ読み取るべきなのである<sup>4)</sup>。

以上で検討した2箇所の比喻について共通しているのは、比喻の範囲が基本的にはリンネルの等価物となっている上衣のあり方までであり、それをリンネルと上衣からなる「簡単な価値形態」全般に妥当する例解ととることには慎重になるべきだということであった。リンネルの価値を表現するには、上衣は単なる商品ではない何か別次元の存在になる必要があり、2つの比喻はそれを強調するために引き合いに出されているわけである。逆に言えば、そうして特別な存在になった上衣が、どのようにリンネルの価値を表現するのかというところについては、安易に比喻から類推すべきではない。その差分は、社会的な人間関係との共通部分に押し込めてしまうのではなく、経済学に固有の問題として追究されなければならないのである。

このような、関係主義的な価値形態論解釈を逸脱した、いわば表現主義的形態論は、価値形態に先立つ価値概念を必要とする。一般に表現は、表現される側の何かがあれば成立しない。価値形態と切り離された価値の実体ではなく、価値形態に表現されるべき性質として、商品に内在する価値を考える必要性はここにある。価値の内存在論は、価値表現のしくみとして価値形態論を説き起こすのに不可欠なのである。

しかしそうだとすると、かくして社会関係としての特性が捨象された2商品の量的関係に、マルクス価値論として考察すべき課題が残っているかどうかの問題とされなければならない。商品の単なる量的関係だけなら、マルクス経済学を持ち出さなくとも、ミクロ経済学で十分対処できるようにも思える。そこで次節では、表現主義の立場からみたマルクス価値形態論を、ミクロ理論と突き合わせてみることにする。

## 2 選好表現と価値表現

『資本論』が出版された頃とほぼ同時代に、今の新古典派ミクロ経済学につながる理論が提出され始めていたが、『資本論』ではそれは直接批判対象とされていない。『資本論』が「経済学批判」として主たる標的としていたのは、古典派経済学と、それを通俗化したブルジョワ経済学であったが、新古典派経済理論はほとんど無視されている。それを「ブルジョワ経済学」として糾弾してきたのは、むしろマルクス以後のマルクス経済学者たちであった。

その際の対立点は多岐にわたるが、最も重要な論点のうちの1つに、価値の実体論があった。すなわち、マルクス経済学では、価値を形成する実体として、対象化された労働量が考えられてきた。それに対して、新古典派ミクロ経済学では、限界効用概念を用いて価格理論が構築されていた。財・サービスから得られる、この効用なる概念は、個人によって異なるだけでなく、それを加減乗除できるものとして、定量的に捉えることができない。とすれば、限界効用は、労働量のように、2商品の量的関係を説明する要素になり得ない。このように、価値の実体をどう定量化するかという点において、マルクス経済学と新古典派経済学とは、鋭く対立していた。

この効用の不可測性問題に、ミクロ経済学者たちは自覚的であった。そこで、効用を量で測ることができなくとも矛盾が生じないように、価格理論を精緻化していくことが試みられていった。すなわち、価格を説明する際に必要なのは、ある財の効用が他の財の効用の何倍なのかということではなく、どちらの方が効用が大きいかという順序付けだけだということが、明らかにされていった。いわゆる基数的効用から序数的効用への転換である。さらに、そうして選好関係から需要を導くのではなく、逆に観察された需要から選好関係を導出する顕示選好理論を用いつつ、少なくともベーシックな価格理論のレベルにおいては、限界効用の概念自体を取り外す方法が考案されてきた。かくしてミクロ価格理論は、投下労働価値説に基づく素朴な批判に対しては、耐性を

有する体系に作り変えられていったと言える。

こうして効用概念が脱色された、無差別曲線だけのミクロ価格理論では、2財の量的な関係だけが問題となる。そうなるとますます、価値形態論において、2商品の交換比率に着目するならば、その点だけでは新古典派の価格理論とは差別化できないように思われてくる。ここから、価値実体としての抽象的人間労働や、物象化の機制等、とにかく交換関係以外の何かを加味しなければ、マルクス経済学たりえないというような自己了解が強まっていくのである。

しかし、価値論、特にマルクス自身がその独自性を誇った価値形態論を、経済学的重要性を持つものとして主張しようとするなら、ミクロ理論が拘る2財の量的関係を理論的に捉えるにあたって、価値形態論が不可欠であることを主張するしかない。ミクロ理論がずっと以前に捨て去った価値実体論や、一顧だにしてこなかった物象化論は、ミクロ理論にとってどうしたって他人事に聞こえてしまう。経済学として価値形態論の意義を訴えるためには、価値形態論が、少なくともミクロ理論とは異なる側面から、その量的関係を照射するものであることを明らかにする必要がある。マルクス経済学が経済学たりうるためには、商品の量をめぐる議論の土俵から降りるわけにはいかないのである。

価値形態論での2商品の量的関係と、新古典派ミクロ理論での2財の量的関係との間の相違をはっきりさせるために、後者の描かれ方の特徴を簡単に確認しておこう。ミクロ経済学では、無差別曲線を描くのに必要な、2財の選好関係が次のように表現される。例えば、 $x$ と $y$ という財の組み合わせが2つあり、 $x = (x_1, x_2), y = (y_1, y_2)$ とにおいて、 $x$ を $y$ より好むなら、

$$x \succ y$$

と表す。

このとき、 $x_1, x_2, y_1, y_2$ という記号は全て、財の種類だけではなく、財の量をも示している。それゆえ、このような選好関係の具体例として、 $x_1 =$ ウーロン茶、 $x_2 = 0, y_1 =$ ビール、 $y_2 = 0$ とにおいて「ウーロン

茶の方がビールより好き」といった表現をあげるのは、正確でない。選好関係には、必ず量が明示されなければならない。この場合の正確な例示は、「ウーロン茶1杯の方がビール1杯より好き」という言い方になる<sup>5)</sup>。

このように、ミクロ価格理論の選好関係は、好みの表現を量化している。しかし我々の自然言語において、好みの表現に量が伴うことはそこまで多くない。「ウーロン茶1杯の方がビール1杯より好き」という言い方は、「ウーロン茶の方がビールより好き」という言い方よりも、不自然に聞こえるはずである。飲食物について好悪を言い表すときに、量はつけないのが普通である。「 $x$ を $y$ より好む」というミクロ価格理論の選好関係を、「ウーロン茶の方がビールより好き」と置き換えてしまっても全く違和感が生じないのが、その何よりの証拠である。

好みを表す際に量をつけないのは、それを省略しているからではない。飲み物の種類として、ウーロン茶とビールを比較しているのであって、ウーロン茶1杯に対し、ビール1.3杯になると、ビールの方が好きになるような、そういう次元の話ではないのである。もちろん、「4時間読書するぐらいなら映画を2本見たい」といったような、量を伴う形の好き嫌いもありうる。しかしそのような場合ですら、なぜかと理由を聞いてみれば、「本より映画の方が好き」だから、というような、量のとれた好みの表現が顔を出す。我々の日常的な経験からすれば、好き嫌いとは基本的に量の問題ではない。

ミクロ経済学の選好関係は、そうした好みの違いを、敢えて全て量化して捉えている。これは先に触れた、効用の不可測性とは別の問題である。効用そのものが測れないだけでなく、その効用の表れである選好関係すら、量表現とは元来無縁の世界を扱っている。それを全て量化するのは、一種の理論的なフィクションなのである。理論は現実を抽象化したものであるから、フィクションであること自体は問題ではない。しかし、どのような意味でフィクションになっているのかは、自覚的になっている必要がある。

マルクス経済学の価値形態論における2商品の関

係が、マイクロ価格理論の選好関係と、見た目は似ていたとしても、決定的に違うのは、この点である。同じフィクションでも、「簡単な価値形態」における2商品の量的関係は、好みの表現ではない。「簡単な価値形態」、例えば「リンネル 20 エレは1着の上衣に値する」という表現がフィクションなのは、実際にはそのような価値表現がなされることはなく、「リンネル 20 エレは2ポンド・スターリングに値する」といったような、貨幣を用いた表現になるからである。価値形態論における2商品の量的関係は、主体による好き嫌いの判断ではなく、価格表示を抽象の基礎としている。

好き嫌いの判断を下したことがない人はいないし、貨幣を単位とした価格の表示を見たことがない人もいない。どちらも誰でも知っている現実であるが、違う現象である。ジュースとコーヒーのどちらを買うか迷うことはあっても、100円のジュース1缶と現金100円との間の好き嫌いを自問することはない。100円出してジュースを買う行為は、お金よりジュースの方が好きだからではなく、ジュースを飲みたいからと説明される方がずっと自然だし、逆にジュースを我慢して100円貯める行為も、好みの問題ではなく、ふつう節約と呼ばれる。

ジュース1缶を100円で販売した人は、それで得た100円を、例えばコーヒー1缶を買うのに使ったのだから、この一連の動きは、ジュースよりコーヒーの方を好む表現というように総括できる、と2つの取引を1つの選好関係にまとめることは、事後的には可能である。しかしこれ自体、一つの理論上の操作であり、こうしなければならないと思込む必要はない。その必然性の論証は、おそらくマイクロ経済学のどの部分でも与えられていない。

注意すべきは、この操作によって、貨幣の存在がはじめから捨象されることになる点である。マイクロ経済学の価格理論では、現実の経済取引からまず貨幣が取り除かれ、好き嫌いの世界へと連れていかれる。ここまでは、誰でも好みの感情を持っているから、現実的な感覚に寄り添っていて、イメージしやすい。そこからさらに、量を含む好みの表現として、選好関係が作り上げられる。既に述べたように、こ

れには好き嫌いの表明方法として不自然なところがあるために、ややとつきにくく、ここから抽象的な思考力が試されることになってくるわけである。

それに対して、マルクス価値形態論は、貨幣が存在する価格表示の世界を直接抽象の基礎としている。ある商品の価格づけを、異種商品の等置関係にダイレクトに結びつけるのが、「簡単な価値形態」の作り方であり、『資本論』で「アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちに1つの同等性関係を発見しているということのうちに、光り輝いている」(Marx[1962]S.74)と称賛されている抽象方法なのである<sup>6)</sup>。マルクス経済学では、まずここで抽象力が求められている。その抽象の結果が、マイクロの選好関係と似たような、2つの商品の交換関係として設定されても、抽象の大元が異なっている以上、それらは同じものにはなりようがない。「簡単な価値形態」の量的関係は、価格表示の抽象結果であるから、必然的に量を含む。量を含まない好き嫌いの表現に、量を付け足した選好関係とは、根本的に異なる<sup>7)</sup>。

マイクロ経済学からは貨幣の存在が忘れられている、ということは繰り返し指摘されてきた。そこでは往々にして、商品と商品の関係からスタートする、マルクス価値形態論も、貨幣がないという意味で同罪にされる。しかし貨幣現象を説明しようというときに、貨幣の存在を与件とするのは理論的な方法にならない。問題は理論の初期設定に貨幣があるかどうかではなく、貨幣を所与としない理論的世界をどのように抽象して作るかというところにある。その方法において、好き嫌いの世界を基礎とするマイクロ価格理論と、価格表示の世界を基礎とするマルクス価値形態論とは、はっきり区別されるべきである。どちらの方がより“経済学的”だと感じるかは、人によるであろうが、どちらか一方を、経済学の名に値しないと貶めるのはあまり意味がない。好みに基づく選択行為も、貨幣を単位とした価格の設定も、いずれも経済学の論じるべき対象であろう。

ところが、関係主義の下では、「リンネル 20 エレは1着の上衣に値する」という価値形態は、「リンネル 20 エレ ~ 上衣1着」と同一視されてしまう。こ

の2つを峻別し、新古典派の選好関係とは違う、2商品関係の経済学的側面を切り出すためには、交換関係を、内在する価値の表現として捉える表現主義的形態論の視角が要される。このことは、経済理論に貨幣の存在を実装するためには、関係主義的形態論では不足することを意味する。交換関係の抽象の基礎を不分明にしてしまう関係主義においては、商品同士が直接交換されることはなく、必ず貨幣に対して販売されることになる貨幣経済を論じる際に、貨幣を理論の外部から挿入することにならざるを得ないからである。それでは、貨幣の内在する市場の理論にはならない。

ただ、経済学が貨幣の存在を説明できる必要があるかどうか、とだけ聞かれれば、よほど一般均衡論を篤く信仰する者でもない限り、YESと答えるに違いない。塩沢 [2017]80 頁でも述べられているように、ある経済理論が「貨幣が内在する市場になっているかどうかは、マルクス経済学であるかどうかと関係なく重要」なのであり、問題はそれが有効になされているかどうかである。

塩沢氏は、小幡道昭氏の価値内在説を取り上げて、それが「貨幣が内在する市場」の理論として有効でない理由を3つ述べている。そのうち第1点と第3点は、理論内容そのものというより、理論の方法についての論点であり、内容的に重要なのは第2点である。それは、「貨幣が内在する市場は、貨幣さえあれば、売手は基本的にいつでも売ってくれるという条件を満たすものでなければならない」が、「そのような理論構築において、商品に価値が内在しているかどうかという論点は、ほとんど意義をもたない」というものである(塩沢 [2017]81 頁)。

確かに塩沢氏自身は、「貨幣さえあれば、売手は基本的にいつでも売ってくれるという条件」を厳密に明らかにしている。その条件は重層的になっているが、ポイントは以下の2つだと思われる。

**要請 4 (産業的生産)** 商品の生産は、一定の比率をもった原材料・部品等が確保されるかぎり、労働力と生産設備容量の限界内においては、一定期間内に任意量の生産を同一の投入産

出関係において行なうことができる。(塩沢 [2017]7 頁)

**要請 5 (調達可能性)** 発達した資本主義経済においては、例外的状況を除いて、企業は任意の商品を一定価格において任意の数量調達することができる。(塩沢 [2017]8 頁)

しかしこれらは、市場に種々の商品が充填されることを保証するが、それらに対する一般的購買力を持つ貨幣という特別な存在がいることを保証するものではない。いわば「商品が内在する市場」の条件にしかっていない。これらの条件が満たされなければ、貨幣を持っていても商品が購買できず、貨幣を保有する意味がなくなるので、貨幣の存在条件も満たされないが、それだけでは貨幣の存在は導出されない。「貨幣さえあれば、売手は基本的にいつでも売ってくれるという条件」というのは、貨幣の存在の必要条件ではあるが、十分条件ではないのである。

それに対して、本稿で見てきたように、価値の内在性の認識は、価値表現論として価値形態の意義を捉えるために必要不可欠であり、そのような表現主義的形態論は、貨幣の内在する市場の基礎理論として、ミクロ価格理論ともはっきりと区別される。価値内在説から展開される価値形態論は、塩沢氏の「現代古典派価値論」が明らかにしない、「貨幣が内在する市場」の必要十分条件を探る領域である。これは、グローバル経済の基礎理論として原理論を構想するにあたっては、「現代古典派価値論」の国際価値論の重大な欠落を埋める試みにもなる。それは、グローバル経済における貨幣の問題である。

### 3 国際通貨体制論に向けて

1950 年代に隆盛を極めたマルクス経済学の国際価値論争においては、貨幣の問題は「貨幣の相対的価値の国民的相違」の決定問題として議論されていた<sup>8)</sup>。この国際価値論争には極めて膨大な量の論考があり、網羅的に調べるのは困難であるが、その中で価値形態論の意義が争点となったことはあまりないようである。既に木下編 [1960]144 頁で「国際価

値論争はマルクスの立場に立つといいながら、単に価値量だけを問題としており、価値形態を問題としていない」ことが問題視されている。しかしそこで価値形態論の中身は、等置関係にある2商品それぞれ単純に投下労働時間に換算し、貨幣価値もそれによって論じるという、プリミティブなものに止まっている<sup>9)</sup>。貨幣は、基本的には労働生産物としての金と置き換えられてしまっており、そこで価値形態論のコア、すなわち商品と非対称的に区別された固有の意味での貨幣が捉えられていたとは言い難い。その結果、商品と貨幣の関係は、単なる労働生産物同士の対称的な交換関係に事実上還元される。国際価値論争の中でも交換比率と価値の区別自体は指摘されていたが、その点において独自の貢献があったわけではなく、やはり中心的な論点は、国を跨いだ商品と商品の交換比率の決定論だったように思われる。

したがって、むろん後知恵ではあるが、かつてのマルクス経済学の国際価値論は、現時点から振り返ってみると、二重の難点を抱えていた。第一に、主要資本主義国が不換制をとる現代世界経済の下では、単純に労働生産物を貨幣に代替させる理論は通用しない。そしてもっと根本的な問題として、第二に、実質的に交換比率だけが論点となっており、貨幣が物品貨幣であれ信用貨幣であれ、その商品に対して持つ特殊性、つまり価値形態論の問題構成を生かすことが、構造的に不可能だったということである。

ここで問題にすべき、国際経済における貨幣の問題領域は、広く国際通貨体制論と呼ばれる。これは、「国際金本位制」や「ドル本位制」というように、歴史的な変化を不可避としてきたものであり、原理論で論定できる対象ではない。それだけでなく、国際通貨体制は世界経済全体を覆うシステムであり、価値形態論や貨幣論のような、原理論の部分領域だけを取り出して適用しても、十全に把握できるものではない。世界的な分業体制や国際金融市場のあり方はもちろん、世界史的・地政学的な条件の下に形成されるのが国際通貨体制であり、これら全体を視野に収めた体系的分析が要される。国際通貨体制論が、原理論ではなく発展段階論の問題とされてきたのは、

そのような事情によるものである。

しかしだからといって、基礎理論との繋がりを考えなくてよいことにはならない。塩沢氏の国際価値論は、マルクス経済学の国際価値論よりも格段に精緻化され進歩しているが、交換比率だけに焦点を絞っているという点で、かつての課題を積み残したままである。すなわち「現代古典派価値論」は、国際経済での貨幣の存在を欠落させたまま構築された理論であり、国際通貨体制の分析軸としてはほとんど無力である。それに対して、貨幣形態の内的な生成ロジックを説く価値形態論を内蔵した、マルクス経済学原理論は、歴史的・制度的要因とのインタラクションの下に、国際通貨体制へと接近する回路を本来有しているはずであった。それにもかかわらず、塩沢氏が指摘するように、多くの場合、暗黙裡に一国経済を原理論の適用対象としてきたマルクス経済学は、一国内の通貨システムとして一度議論を完結させたのちに、国際通貨体制に話を転じる二段構えをとってきた。これによって、原理論の対象とする範囲が分かりやすくなる反面、複数の資本主義国／地域の経済的・政治的・社会的要因が交錯する通貨問題に、原理論がどのような意味で基礎となっているのかは必ずしも明確でなかった。

グローバル資本主義として資本主義の現段階を押しえるなら、むしろこうした原理論の自縛性が問題視されなければならない。原理論の適用範囲は、当然に一国経済となるというわけではない。逆に、統一された貨幣単位を結論とする原理的な貨幣論を自明視することによって、単一通貨圏としての国民経済が原理論の範囲とされてきた嫌いすらある。しかし、とりわけ近年の価値形態論の研究は、商品経済的論理のみで一般的等価形態を導出することの無理を強調するようになってきている<sup>10)</sup>。等価物の統一には、国家を含む非商品経済的要因が要されるのである。とすればなおさら、原理論と国民経済の関係性は問い直されなければならないであろう。資本主義がグローバルに展開するなら、はじめからグローバルに開かれた原理論も構想されてよいはずである。

こうして、価値形態論を備えた原理論の体系の眼鏡をかけて、現代の資本主義を見やるならば、国際通

貨体制の問題は、単に世界貨幣あるいは基軸通貨がどのように成立するか、という問題ではなく、より重層的な構造を伴って立ち現れてくる。まず考察の前提となるのは、基軸通貨ドルの下で、これだけグローバル化が叫ばれるようになって、通貨にはなお様々な種類があり、それは多元化の度合いを強めているようにさえ見えるということである。原理論では“貨幣はあらゆる商品の価値表現を統一的に担う”などと言われるが、グローバル資本主義では、貨幣は極めて多軸的な存在であり、むしろそれが説明対象として据えられなければならない。“あらゆる商品の価値表現”といっても、それは字句通りではなく、ある範囲を持っているのである。こうした貨幣の分立状況は、単純に国境には対応していない。通貨圏は多くの場合国民国家の範囲と一致しているが、例外も多い。そうだとすると、貨幣形態の導出に非商品経済的要因が関わるだけでなく、その関わり方の中身を分析する必要性が、ここに見出されなければならない<sup>11)</sup>。

どれだけ多数の主体が等価物として採用すれば、ある商品が貨幣と呼べるようになるのかと問うのは、建設的な問題の立て方ではないが、ある程度の数の主体によって価値表現の媒体として使われていることは前提として、そこからそれが貨幣へと昇格する要件を確定するのは理論的に必要な作業である。一般的等価物の候補がいくつか存在するときに、そのどれを使って価値表現がなされるかは、主体がその「他人のための使用価値」の「他人」をどう捉えているかということによる。この理論的な問題は、通貨圏が複数ある現実の世界でも同様に再現する。自商品をどの通貨単位で値付けするかは、それをどのマーケットで売るつもりなのか、ということと不可分である。「円」で価格表示するのは、日本で売からそうするのであって、海外で売ろうとするなら、また別の値付けが必要になる。

つまり、価値表現の方式は、表現対象となる商品の価値が通用する空間的境域に依存する。言うまでもなく、この境域の決定には歴史的・制度的要因が作用する。そして貨幣が成立するには、この範囲の中である程度公的な性格を具備した主体が、商品経済的

に絞り込まれた候補のうちから、一般的等価物を絞り込む作業を主導することが必要である。この主体が歴史的に多くの場合国民国家だったのは、価値が通用する空間的境域を政治的・社会的に統合できるのが、それがどんなに想像の共同体に過ぎなかったとしても、国民国家という枠組み以外になかったからである。国家による一般的等価物の絞り込み方は、商品経済がどのような形で等価物を選出してきたかに応じて変わる。それは、国営の鑄造場の創設だったり、中央銀行の創設だったりするわけである<sup>12)</sup>。

このことを逆に言えば、同じ作業を遂行できるのであれば、その担い手は国民国家である必要はない。しかし、それは価値の空間的境域において、公益性を体现している必要がある。通貨がグローバルに多元的であらざるを得ない主たる要因は、原理的に見て、貨幣成立の最後の一手を担うこの公的主体が、世界経済の中では一元化され得ないというところにある。実際、グローバル資本主義の下でもなお、貨幣単位が、自然科学的な性質の単位のように国際的に統一される兆しすらないのは、価格の度量標準が単に形式的なものではないということを示している。貨幣形態は、具体的な歴史過程を積層させた空間的境域における、価値のイメージを体化している。価値そのものは、混じり気のない商品の交換可能性として、原理的に説き得たとしても、それを表象するイメージたる貨幣には、そのような共同性が刻印されるのである<sup>13)</sup>。

貨幣を成立させる価値の空間的境域は、そこで商品の交換可能性が実現されるかどうかで決まり、国民経済としてのまとまりからはひとまず独立である。ここから国際通貨体制の次元にたどり着くには、その時々資本主義の段階認識の介在を要するが、国際通貨体制論は、国民経済を所与としてではなく、こうした価値形態としての貨幣の成立を前提に構築されるべきだということは少なくともはっきりしている。基軸通貨の形成も、単なる歴史的事実に帰せられるのではなく、やはりそれを資本主義の原理から体系的に捉え返した上で、その歴史的段階のうちに位置づけられなければならない。そのうちに、基軸通貨がどの程度まで資本主義にとって必要と言え

るのか、いわば基軸通貨の必然性を考察していくべきなのである。

以上のように、価値の表現がなされる力学は、原理的な価値論と歴史的・制度的要因が交錯する地点を扱わねばならない。こうした問題領域を経済学の課題と見るべきかどうかは、新古典派への対抗という学問上の争点だけでなく、資本主義を捉えるにあたり、経済学がいかなる貢献をなすのかという論点にかかわる。価値形態論抜きで経済理論は、その構造上ここにコミットすることができない。その意味で、日本のマルクス経済学が、多くの困難と混乱を伴いながらも、価値形態を価値論として論じることをあくまで止めずにきたことは、経済学の研究史上、忘却されるべきでない。

## 脚注

<sup>1)</sup> 江原 [2015] 第 1 章。

<sup>2)</sup> こうした関係主義的な価値形態論の展開については、廣松 [2010] 第 7 節参照。大黒 [2016]65 頁は、「廣松物象化論的方法的核心は、関係の実体的基盤を明らかにしつつも、やはりその実体的基盤をさらに関係に還元するという周到さのうちにこそある」とし、単に関係主義でない廣松 [2010] の意義を強調している。しかし、それでもなお「関係を作り出し関係を衝き動かす実体の側面が抜け落ちてしまう」点が糾弾され、それは「価値形態論解釈における「非対称性」の欠如とも即応しよう」と述べられている。その限りで、廣松 [2010] の価値形態論は、本文で行論のうちに明らかにされる、表現主義の立場とは区別される。

<sup>3)</sup> 大黒 [2016]11 頁では、この王位との比喻について、価値と「不可視の権力のあり方」が同型であるとされる。しかし仮に価値と権力に相同性が認められたとしても、それらが同じ表現形態を持つかどうかは、改めて検証する必要がある。

<sup>4)</sup> 廣松 [2010] には、この王と臣下の例は引かれていない。しかし先のパウロとペテロの例には繰り返し言及があり、王と臣下の例と同じように、「こうした対他-対自=対自-対他的な反照規定 Reflexionsbestimmung においてはじめて、A[リンネル所有者]とB[上衣所有者]は互いに他者の生産物を価値物として、そして対他的被媒介性において各々自己の生産物をも価値物として、相互共軌的に認知するのである」(194 頁、[]内は引用者)とされている。

<sup>5)</sup> 神取 [2014]10 頁でも、選好関係の具体例として「ウーロン茶 > ビール」が挙げられてはいるが、その直前で

「ウーロン茶 (一杯)、ビール (一杯)」として、それらの量が明記されている。

<sup>6)</sup> 伊藤 [2010] では、マルクスのこの論評はむしろそれに続く「ただ、彼の生きていた社会の歴史的な限界が、ではこの同等性関係は「ほんとうは」どこにあるのか、を彼が見つげ出すことを妨げている」(Marx[1962]S.74) という方に力点が置かれているとした上で、宇野 [2016] の価値形態論によりつつ、『資本論』では、直接的交換可能性を貨幣が独占する仕組みを明らかにしていないというアリストテレスの分析の限界が指摘されていないところが問題視されている。しかし、W—G—W' という売買活動の結果ではなく、いわば W—G、それも売買が成立する以前の、価格表示の段階に焦点を当て、そこを抽象化することで 2 商品の関係を得ようとする方法は、直接的交換可能性の問題を措いたとしても、なお『資本論』の価値形態論がアリストテレスの分析と共有している点として、強調されてよいように思われる。

<sup>7)</sup> このことは、宇野 [2016] のように商品所有者を持ち出して、等価物を彼/彼女の欲求の対象だとしても変わらない。リンネル所有者が上衣 1 着を欲するのは、上衣というモノと主体の間関係だけから出てくるものであり、リンネルとの好みを比較した結果ではない。欲求は主体とモノの関係だけで完結しているのに対して、選好は主体によるモノとモノの比較なのである。上衣 1 着を等価物として選定したのちには、有用性はなんらの役割も果たさず、リンネル 20 エレとの等置は、それらに内在する価値の比較考量だけでなされる。それゆえ、リンネル所有者の欲求の結果として、「リンネル 20 エレは 1 着の上衣に値する」と言われたとしても、これを「リンネル 20 エレより 1 着の上衣の方が好き」という選好関係に読み替えてはならない。そういう選好関係は、「リンネルより上衣の方が好き」という、全く別の現象を、数学的に処理できるように据え直したものである。

<sup>8)</sup> 国際価値論争の整理については、木下編 [1960] 附論や鳴瀬 [1985]、塩沢 [2014]250 頁以下を参照。

<sup>9)</sup> 木下 [1963] 第 2 編第 3 章も参照。

<sup>10)</sup> 岡部 [1996]、泉 [2009] 等。

<sup>11)</sup> 李 [2017] のように、このように多元的な「各通貨信用ネットワークの複合体としてのグローバル金融システム像」(52 頁)を強調し、実証分析を試みる研究も出てきている。

<sup>12)</sup> 隅田 [2016] は、日本のマルクス主義国家論が、国家の問題を経済学的規定から切離してきたことを問題視し、「資本主義社会の政治的形態」を「社会の経済的構造の基礎をなす価値という経済的形態規定…を間接的に補完する国家機構として立ち立てられる」ものとして捉える必要性を論じている (135,136 頁)。そこではそれが「物象化論的アプローチ」の核心 (139 頁)と特徴づけられているが、どのようなラベリングをするにせよ、マルクス経済学

の価値論は、もはや単純に政治的・社会的要因から切れて独自に完結するものではなく、それらとどう関連しているかを解明する課題を背負うものとして再構築されなければならない。

<sup>13)</sup> 貨幣が共同性を帯びているからといって、価値がそ

うだということにはならないことには注意が必要である。自然科学的な性質と異なり、価値はその知覚に際し表現形態を必須とするため、両者の区別が曖昧になりがちであるが、価値の表現形態の特性と、表現される側の価値の特性は別の問題である。

## 参考文献

- Marx, Karl [1962] *Das Kapital*, Buch I, in *Marx-Engels Werke*, Bd.23, Dietz Verlag.
- 泉正樹 [2009] 「純粋資本主義論における一般的価値形態の成立—市場の成り立ちに関する一試論」『東北学院大学経済学論集』第 171 号.
- 李素軒 [2017] 「重層的信用ネットワークとしてのグローバル金融システムとデリバティブ：韓国為替デリバティブ市場を事例に」『季刊経済理論』第 54 巻第 1 号.
- 伊藤誠 [2010] 「価値概念の深化とその歴史的基礎」櫻井・柴垣・伊藤・山口編『宇野理論の現在と論点』第 3 章, 社会評論社.
- 宇野弘蔵 [2016] 『経済原論』岩波文庫.
- 江原慶 [2015] 「資本主義的市場と恐慌の理論」東京大学博士学位取得論文.
- 岡部洋實 [1996] 「貨幣「制度」生成の論理」河村哲二編『制度と組織の経済学』第 9 章、日本評論社.
- 神取道宏 [2014] 『ミクロ経済学の力』日本評論社.
- 木下悦二編 [1960] 『論争・国際価値論』弘文堂.
- 木下悦二 [1963] 『資本主義と外国貿易』有斐閣.
- 櫻井毅 [1968] 『生産価格の理論』東京大学出版会.
- 塩沢由典 [2014] 『リカード貿易問題の最終解決』岩波書店.
- 塩沢由典 [2017] 「現代資本主義分析のための原理論：現代古典派価値論と宇野理論」『「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter』第 2 期第 20 号.
- 隅田聡一郎 [2016] 「マルクスの唯物論的国家論：「国家導出論争」再考」『ニュクス』第 3 号.
- 大黒弘慈 [2016] 『マルクスと贗金づくりたち』岩波書店.
- 鳴瀬成洋 [1985] 「国際価値論をめぐる論争」木下・村岡編『資本論体系』第 8 巻, 有斐閣.
- 廣松渉 [2010] 『資本論の哲学』平凡社ライブラリー.